

睡眠薬と煙草…冬

漱

「このおくすり^ゴは脳内のオレキシン受容体に作用し、従来の薬に比べてより自然な眠りを誘発します」

睡眠薬を飲むのに、自然な眠りもへったくれもあるもんか。注意書きに書かれた唄い文句を見るたびに、いつもそんなことを考えている。

前の薬^イはダメだった。記憶が飛んで、起きた時には部屋がめちゃくちゃだった。座椅子は倒れていたし、起きたら食べようと思っていた鶏肉のトマト煮はなくなっていて、ベタベタの食器がテーブルの上に残っていただけだった。

そこら中にトマトソースがぶちまけられていて、しばらく部屋はどこにいてもイタリアンな香りしかなかった。怖くなって、しばらく薬が飲めなくなった。

通院の度に薬は増えていく。これからも増え続けるんだろうな、とぼんやり不安になる。今は何種類だったろうか？ 抗不安薬^ア、抗精神薬^ア、ベンゾ系睡眠薬^ド、非ベンゾ系睡眠薬^ネ……
それから、新しい薬^イ。ちょうど片手で収まる数で少しホツとする。

まあ、普通に生きてれば、ひとつも飲まずに済んだんだろうけど。なんて自嘲しながら、ほとんど空っぽの冷蔵庫から飲みかけの烏龍茶を取り出して、ルーテイン化された手つきで錠剤を流し込む。ほんの少し、胸が苦しくなった。

直ぐに眠気はやって来ない。汚れたベランダに出て、くしゃくしゃになったロングピースを肺に焚べながら、辛抱強く波を待つ。凍える寒空の下、あまねく星々を眺めながら一服する。近視かつ乱視の瞳を通してでは、ひとつの星が何重にもなっていてとても見れたものじゃないのだけれど。

そんなの知ったことか、と有名無名の恒星たちは、自分勝手に久遠の闇へと、誇示するように自己主張を続けている。

そっちがその気なら、と唾を吐きかけるような心持ちで、宇宙空間で光る老害共に向けて、強く煙を吹きつけてやった。

それにしても、冬の煙草はどうしてこんなに美味いんだろう。冷たく澄んだ空気が、毒の煙を吐き出した後の肺いっぱい詰まされて、この上ない快感が身体中に広がるのを感じる。

短くなった煙草の先から上る、青空と同じ原理で淡く色付いた紫煙は、暗い夜空へ吸い込まれてかき消される。溜息交じりに吐いた煙が、そのぼやけた輪郭を失っていく様を眺めていると、私という存在も薄れ、冬の夜に溶けていく感覚があつて、少し嬉しくなった。

波を拾った。多少のふらつきと、前頭葉が締めつけられるような、うまく頭の働かない感じがある。乗り遅れないように、慎重にベッドに横たわる。毛布の冷たさに辟易しながら、目を閉じて眠気に集中する。

背中を丸めた、胎児みたいな姿勢で、沈んでいくのをイメージする。身体中の力が抜けて、マットレスすら通り抜けて、どんどん奥へ沈んでいく。周りにはふわふわの雲でも、底なしの暗闇でもなんでもいい。どんどん落ちていく。心地良さで満たされていくのと同時に、嗚呼、これは現実逃避でしかないんだろうな、という諦観が湧いてきた。

脳内物質の作用で思考や感情が決定されるのだとしたら、薬によって調整された、いまこの瞬間の私は一体何なんだろう。

電気信号の乗り物？ 化学物質の奴隷？

ニューロンを走る電気信号が、化学物質の放出を促す。その繰り返しに過ぎないマイクロな伝言ゲームを、私が勝手に思考や感情と捉えているだけなんだろうか。

私という主体は、いまこの瞬間、確かに実在しているのだろうか。

薬がますます効いてきた。脳のリソースがどんどん奪われて、思考が曲がる。自分が異常な状態にあることを自覚しながらも、それがしつくりくる感じがした。頭に霞がかかって、うまく働いていないのが理解できる。

これは絶対に自然な眠りじゃないだろ、と心の中で悪態をついたのはいいものの、普通の眠り方なんて忘れてしまった私が言うのもおかしい話ではあるな、と勝手に反省した。脳が溶けて、身体は更に奥へと、どこまでも深く沈んでいく。

(いつになったら、ふつうになれるのかな)

ぼやけた頭でそんなことを考えた刹那、睡眠薬に侵された脳は、くだらない抵抗を続ける矮小な自意識を、強制的にシャットダウンした。